

モントレイの紀州人

櫻井 敬人（和歌山県太地町歴史資料室学芸員）

紀州と房州の渡航目的の違い

和歌山県は「移民県」と呼ばれるほど、紀州から大勢の男女が海外出稼ぎに従事した。県当局が1957（昭和32）年に発行した『和歌山縣移民史』には、カリフォルニア州における邦人漁業の発祥の地はモントレイであり、「野田音三郎がアワビ採取を企てた時本県人を率いて来たことから始まる」と書かれている。1914（大正3）年頃にモントレイにいた和歌山県人50名が列挙されており、全員が県中南部出身者で、特に宇久井（那智勝浦町）出身者が17名でもっとも多い。

潜水漁業史研究の泰斗である大場俊雄は、1897（明治30）年から1941（昭和16）年までの間に、モントレイおよびカーメルでアワビ漁業に従事した日本人として135名を確認している。もっとも多かったのが太地（太地町）と宇久井の出身者であった。

大場は、他県出身者と違って、千葉県出身者はアワビ漁業に従事する明確な目的を持って渡米したことを指摘している。『官報』（1898〔明治31〕年5月7日）によると、「佐賀縣人野田音三郎ナル者紀州熊野ノ漁夫ニシテ兼テ當國ニ在留スル者数人ヲ率ヒテ」と書かれていて、野田と一緒にアワビを採った紀州人は熊野地方出身の漁業者であったことが示唆されている。彼らは野田と共に森林伐採に従事していたようなので、確かに漁業をするために渡米したわけではなさそうである。大場はまた、密入国者が和歌山県に多かったことも指摘している。『太地町史』に記載された624名の渡米者のうち、実に80名の男性が密入国者であった。日本人の自由渡航が困難になった後も、紀伊半島南部の浦々では海外出稼ぎの熱が止むことはなかったのである。

初期の紀州人

『那智勝浦町史』下巻には、モントレイの先駆者として3名の同町出身者が紹介されている。宇久井出身の泉島吉は1901（明治34）年に亡くなり、モントレイの墓地に葬られているが渡米年は分からない。下里出身の浜口太郎一は、1910（明治43）年のアメリカの国勢調査記録に記載があり、その時点で45歳なので、早い時代に渡米していた可能性がある。彼は1917（大正6）年に亡くなってモントレイの墓地に葬られている。東常次郎は1911（明治44）年の『日米年鑑』第7号に記載があり、モントレイのワシントン通りで旅館を経営していた。

1897（明治30）年以降にモントレイにやって来る日本人が増え、アワビだけでなくサーモンやイワシ漁業に大勢に従事した。モントレイ・デイリー・ヘラルド紙によると、1909（明治42）年のサーモン漁期の終わり頃、モントレイ湾には185隻の漁船があつて、そのうち実に145隻が日本人所有であつたという。

1922（大正11）年出版の『在米日本人人名辞典』に掲載されている紀州出身者のうち、明治20年代にモントレイにいた可能性のある人物がひとりある。1874（明治7）年に太地で生まれた東竹四郎は1896（明治29）年に渡米して、モントレイで2年間だけ漁業に従事して、ロサンゼルス港周辺のサンピードロに移住し、やがて諏訪丸を所有している。後に宇久井と太地出身者が増えていくことになるので、東はモントレイにおける日本人先駆者の可能性があるが、『在米日本人史』などによると、野田たちがアワビの存在に気付いたのは1895（明治28）年なので、モントレイにおける紀州人の草分けはもっと前に渡米した人たちかもしれない。

東竹四郎はモントレイを去って、1900（明治

33) 年頃からサンピードロ南端のホワイト・ポイントでアワビを採り始めた最初の日本人のひとりとして『サンピードロ同胞発展録』などに記録されている。東に加えて、畑下良次郎、巽幸兵衛（下里 [那智勝浦町]、1899 [明治 32] 年渡米）、谷甚四郎（浦神、1897 [明治 30] 年渡米）、畑下要太郎、浦神文太郎（浦神）、梶吉松（太地）、遠見岩松（太地）、花村安松（太地）、漁野吉郎兵衛（太地）、小畑宇吉（太地）、畑下三吉、そして浜下善吉（田原）の名が挙げられている。また 1902（明治 35）年頃から前田金蔵（太地）、筋師重太郎（太地）、山本孝太郎らがサンピードロで漁業を始めたとも記載されている。出身地が判明していない男たちも紀伊半島南部に多い名字を有しており、サンピードロの日本人パイオニアの故郷は熊野の浦々と考えてよかろう。サンピードロとモンレーの日本人漁業の開始に何らかの連動があると想像するが、明治 20 年代に渡米した人々の記録は少なく詳細は不明である。『太地町史』には、1891（明治 24）年頃に渡米したものとして、藪内音之助、角川謙二、和田新太郎、筋師千代市、和田小文治、和田五郎市、衣笠米蔵、向井音市、山下忠六、そして山下菊松の名が記載されている。彼らがモンレーに滞在したかは定かではない。

太地出身の奥村弥五市の足取りが、孫のビンセント・オクムラによる詳細な調査によって明らかになっている。奥村は 1907（明治 40）年 1 月にホノルルに、次いで 7 月にカナダのバンクーバーに到着した。米国オレゴン州ペンドルトンで鉄道敷設工事に従事した後、1910（明治 43）年にモンレーでアワビを採り始めた。その直前にサンピードロのホワイト・ポイントで潜水器漁業を短期間だけ習ったという。弟の留松は 1915（大正 4）年に、妹のこまつは 1918（大正 7）年にロサンゼルス港ターミナル・アイランドにやって来た。妻で、太地出身のつねが作る家庭料理と日本式のお風呂を目当てに、

季節的にカリフォルニア州北部海域に出漁するターミナル・アイランドの日系人漁業者が頻繁にモンレーの奥村家を訪ねていたという。20 年以上にわたってアワビ漁を続けた奥村の船の名は、大場の聞き取り調査から「ハーバード」であったことが判明している。

奥村は台風で船が損壊したことをきっかけに潜水漁をやめ、1930 年代末にサンフランシスコの会社が所有する巻き網船シー・クイーン号の船長になり、高校生の息子タケシも加わってイワシなどを獲った。強制収容されたアリゾナ州ポストン収容所で 4 年を過ごし、奥村一家は 1946（昭和 21）年にモンレーのアンソニー通りの家に戻った。晩年の奥村は他の日本人と一緒にデルモンテ・ホテル会社に雇われて森林伐採の仕事をするようになった。モンレーで 6 人の子を育てた奥村弥五市は、1951（昭和 26）年 11 月 13 日に心臓発作で亡くなった。

鯨組の遭難

房州根本で最新のアワビ潜水器漁業が始まった 1878（明治 11）年の、暮れも押し詰まった 12 月 24 日早朝、紀州熊野太地浦沖に 2 頭のセミクジラが現れた。燈明崎で捕鯨を指揮した和田金右衛門頼芳が残した『脊美流れの控え』によると、太地の鯨組は夜を徹してクジラを追い、翌朝には 2 頭を仕留めた。しかし沖合遠くまで流されたためにすぐに戻れず、やがて天候が悪化して遭難した。船団は獲物を放棄して陸を目指したが、百名以上が行方不明になった。

村を混乱の渦に陥れた未曾有の海難からしばらく経つと、青年や事故の生還者のなかから海外に活路を見出すものが現れた。たとえば鯨組で刃刺（鉾打ち）を務めた近大夫の息子で、^{ちかだゆう}1886（明治 19）年生まれの漁野千代松は 1907（明治 40）年に渡米し、シアトル近郊の製材所で 10 年働いた後にターミナル・アイランドへ来て家庭を築き、巻き網船ペイトリオット号を所有してマグロを追った。千代松の弟で 5 歳年

下の漁野貫大夫は密入国し、一時期モントレーでアワビを採り、戦中は強制収容されて、戦後に太地に戻った。貫大夫のアメリカでの足取りは全く知られていない。ただし大場の聞き取りで、彼の船の名が「スワ」であるのは諏訪神社を崇敬していたからだと判明している。『サンピドロ同胞発展録』によると、スワ丸は兄の千代松が大正時代に経営したとあるので、兄弟船でアワビを採った時代があったのかもしれない。貫大夫よりも前にモントレーにいた太地出身の東竹四郎の船も諏訪丸であり、関係が想定される。

豪州から始まった移民

日本人潜水夫がパスポートを受領して初めて合法的に出国したのは1883(明治16)年のことである。オーストラリア木曜島における白蝶貝の採取に従事する日本人男性37名がイギリス人のジョン・ミラーと契約しており、その斡旋をしたのは日本に潜水器械を導入した増田萬吉であった。外務省に残る旅券下付資料を精細に調べた大場俊雄、鈴木政和、清水昭の調査成果を使って、一木一郎が著した『日本潜水の祖・増田萬吉』のなかに彼ら37名が列挙されている。5名が千葉県、20名が神奈川県、12名が他県出身者で、和歌山県出身者が含まれているかは不明である。

1884(明治17)年からの4年間は、資料上に潜水夫の記録はないという。1888(明治21)年から1892(明治25)年の間にパスポートを取得した潜水夫は39名あり、そのうち熊本県と長崎県出身者が26名であった。

1893(明治26)年になると潜水夫の数が335名と急増し、そのうち実に183名が和歌山県南部の出身で、全員が採貝業を目的としていた。なかでも現在の串本町に含まれる浦々の出身者が141名と圧倒的に多かった。太地からオーストラリアに渡る男たちが現れたのは明治22年以降であったようだが詳細は不明である。

1892(明治25)年に海野定治をはじめとする6名が西豪州ブルームに渡ったのを皮切りに、以後大勢の男が後に続いた。渡米する人々が現れたのもこの頃のことである。

明治30年代より前に渡米した紀州の男たちは、森林伐採、製材所、鉄道敷設工事、鉱山などあらゆる仕事に従事したようだが、20世紀初めにアメリカで水産業が盛んになると、渡米前に身につけた海の技能を活かすべく漁業に職を得たものが多かった。1900(明治33)年頃からサンピードロのホワイト・ポイントでアワビ漁業が始まり、乾鮑に加工したというのでモントレーのアワビ漁業との関係が予想される。

1905(明治38)年にアワビ漁が禁止されると、彼らはターミナル・アイランドへ移動していった。アメリカにおける水産資源開発の興隆に伴って、ロサンゼルス港の一角に位置するターミナル・アイランドの漁港フィッシュ・ハーバーの整備が進み、折から稼働していた水産缶詰会社が移民を労働者として雇ったのである。

缶詰工場の背後に立ち並んだ社宅には、開戦時にはおよそ3,000名の日系人が暮らしていたという。工場ではイタリア人やクロアチア人など地中海沿岸諸国からの移民も働いていたが、島に住んでいたのはほぼ日系人だけであった。

羅府新報社が1940(昭和15)年に発行した住所録によると、ターミナル・アイランドには849名の成人の日系人が住んでいた。日本人は帰化不能外国人と規定されていたため、326名の成人二世以外は日本から来た一世である。最も多かったのが298名の和歌山県出身者で、次に多かったのが65名の静岡県出身者であった。島に住所をおく同郷会として記載されているのは、太地町人会、片田村人会(三重県志摩市)、宇久井同郷会(那智勝浦町)、田並郷友会(串本町)、和深村人会(同)、田原村人会(同)、江住村人会(西牟婁郡すさみ町)、蒲原町人郷友会(静岡市清水区)、日高親友会(日高郡日高町)で、紀伊半島南部出身者が多いことが明らかで

ある。

「宇久井の金さん」は亀井金右衛門か

野田と一緒に木を伐りながら、やがてモントレイの海に入ってアワビを採った紀州人は誰だったのか。先に述べた通り、『官報』に「紀州熊野ノ漁夫」と書かれており、在米の熊野地方出身者であったことが示唆されている。さらに『農商務省商工彙報』（明治41年臨時増刊）に収録された「米國ニ於ケル本邦採鮑業者ノ状態并ニ経営法ニ就テ（明治四十一年七月在米國海外實業練習生椎原廣男報告）」によれば、紀州熊野出身の「漁夫亀井金右衛門」が、1895（明治28）年に野田音三郎と一緒にモントレイへ来て各種漁業に従事し、また船も多く作って、1909（明治41）年の時点でも小谷源之助とアワビを採っていたという。モントレイには宇久井出身者が多く、亀井姓は宇久井に多いことが知られている。亀井金右衛門が先駆者のひとりである可能性は高い。

1910（明治42）年のアメリカ合衆国国勢調査には、1895（明治28）年にアメリカに入国した Kamei Kinemon という人物の記録があり、亀井金右衛門と思われる。彼は、モントレイから南に80キロほど離れたカンブリアにいる11人の日本人漁業者のなかで最年長の52歳であった。一緒にいた21歳で最も若い Nakaji Sadao は宇久井出身であることが米國徴兵記録などから判明している。

26歳の Oda Zenjiro は1922年の『日米住所録』に記録された尾田善次郎とおそらく同一人物で、尾田常太郎の弟である。1922（大正11）年発行の『在米日本人人名辞典』によると、尾田常太郎は宇久井出身で、1906（明治39）年に渡米して漁業に従事し、のちにカナリー・ロウで缶詰工場を経営して、日本人会副会長も務めた。JACL（日系アメリカ人市民同盟）モントレイ半島支部理事で、全米 JACL 前会長のラリー・オダは、尾田常太郎の孫である。

Hamaguchi Taroichi は『那智勝浦町史』にモントレイの先駆者として登場する浜口太郎一であろう。亀井金右衛門は浜口よりも7歳も年上である。他にも Owashi、Kobata など紀伊半島南部の浦々に多い姓を持つ20代から30代の人物が含まれている。1910（明治42）年の時点で、Kamei（亀井金右衛門）と浜口太郎一は、カンブリア地方における紀州人アワビ漁業集団の統率者だったのではないか。

亀井金右衛門は、1915（大正4）年の時点ではターミナル・アイランドにあるホワイトスター社の「千早」に小畑宇吉と乗船したことが『サンピドロ同胞発展録』に記されている。1878（明治11）年に太地で生まれた小畑はホワイト・ポイントでアワビを採り始めたパイオニアのひとりであった。亀井金右衛門や浜口太郎一は、モントレイの日本人アワビ漁業のパイオニアだったのではないだろうか。

『小説倶楽部』の1959（昭和34）年10月号に、棟田博の「黒潮太郎」という短編が収録されている。そこに「もぐりの神様と称えられている宇久井の金さんこと、東牟婁郡宇久井村の亀井金右衛門」が登場する。「宇久井の金さん」は、痩せっぽちで色黒の、何の変哲もない中年ダイバーだが、大正時代の半ばの豪州アラフラ海で、重い潜水服を着用せず、ヘルメットだけ被って潜水した最初のダイバーとして描かれている。あくまで小説中の虚構ではあるが、岡山県出身の作家がアラフラ海の真珠漁業の歴史を取材するなかで、どこか熊野の海辺の村で語種になっていたアメリカ帰りの潜水夫の名を耳にしたのではなかったか。もしや「金さん」は、アラフラ海から帰国して、さらに渡米したのではなかったか。太地には、西豪州ブルームへ渡って真珠貝を採り、さらにターミナル・アイランドで働いてから帰国した人物が実在する。私は想像の翼をたたんでヘルメットを被り、深広の海へと沈んでいく。